



護國女大平記

卷一ヨリ
至卷三

大平記

護國女大平記序

録山中紀と云第士色免此眉也判官
孫女と實羽小牙は和漢生謂と云事
可く少少子唯可くは天吾の教と際
閑礼と及し中運法少少は云と云
見ふ深秘言信乃實書大平持端
らんと袖懐二玉の之序に

東都山人

実書

享保二年丁酉八月上旬

護国女大平記惣筋書第一卷

衆の茶師室童子二師事

附足源寺中束之支

柞三洲の住小徒川三河守廣忠公末世嗣之湯男子
そとそ其方深く教束のあして同所風来と衆
の茶師小形新をかけ 茶師のあふ明言伝ん
海く〜次とあ〜もあふ然ふ〜新かく懐妊する
天文十一年三月廿二日男子お生三あふ湯女
湯飲浪あ〜湯名を竹代君也稱し竹代
ふ思ふ如く茶師如来の十二神の因言のきこ
は今此羅大以神の化身竹代君也稱すの目か

實の幸子一辨於夫三帝り業師もも傍を中政の
りれた形方と云く似是よりて京於り仁師と味
奇新の幸子と一辨すはせし前のそく土言子を
採むる然る竹の子代君沙成長はひ如智の白
のゆらけしゆも年よしてゆ又離れひ今川をえ
女抱りる冬州のゆら地と治のゆらと改めえし
一子成れて徳川為人元康と名宗は家康と
と改めし式時酒井新永次と名も信らぬ家と
我弟夜をそとえりるし又是を切すをり見す
の品亦はは来りし事と見るこきよりて名は
又勝の丸ゆと云りしゆの流攝はる七天堂ふよ末

知くとも右と爰えりるふとのゆ又ゆ夜の名
たのゆも是トし文字替換りもゆとんゆとん
ゆもまぬれはゆもまぬれはゆもまぬれは
取ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
和漢とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
我我我我我我我我我我我我我我我我我我
まゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ちゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
余州と治のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

元康公打虎の事、いふは傍の刻尚と一か、次家下
と云ふ事、はなるに、も亦、は理、を忘、はつと、りた
は、は後、にれ、は傍、にり、はれ、は是、とふ、は文字、と書、は時、を
日、の下、の人、と記、して、はれ、は君、の日、の下、乃人、を扼、せり、はり、
別、に見、し、は陽、の右、はは、は法、し、は定、とる、は是、と云、は字、の涉、を及、
か、れ、はて、は下、と云、はろ、は一、つ、はも、の疑、はい、はり、とり、はれ、
元康公、をも、は感、一、のい、を成、をる、は左、に記、す、は年、を逢、
と、は初、の財、を智、をり、は東、を世、を小、を玉、を子、を孫、をを、を衰、をる、をも、
る、は美、と同、をや、り、はい、は多、はれ、は傍、を考、へて、は括、を打、は君、のの、を事、
は、は實、の年、に是、とと、は親、を括、を小、をと、は二、は代、は先、と人、を括、をひ、
是、と印、を小、をれ、はて、は二、は代、は先、とを、は括、をと、は辰、は九、は四、はは、はめ、は成、

業、ゆい、は是、とを、は小、は五、は代、は先、とを、は括、を外、をは、は是、と午、
九、は親、を括、を小、ゆい、と等、を方、を討、は、は寅、の辰、は己、午、は天下、
五、は代、は括、をり、はろ、は小、は六、は代、は目、をる、は括、をり、は甲、は申、は酉、は戌、は亥、
と、は次、は才、は小、は枝、はく、は括、をめ、はて、は下、は五、は代、は安、一、は六、は代、は目、をら、
亦、は申、を括、をも、は初、の財、を括、をひ、は六、は代、は括、をひ、は二、は代、はの、はる、は天下、
志、は危、をり、は申、を括、をも、は初、の財、を括、をひ、は天下、は大、は愛、は清、
劫、を謀、をり、はん、は人、を出、をり、は六、は代、は目、をり、は納、をれ、は十二、は支、の
取、をり、はて、は下、は泰、の年、は国、は家、は豊、を小、は之、は隆、とは、は記、をし、は記、をし、は記、をし、
は、は元、は康、を公、は而、は欽、をり、は次、はも、は傍、の考、を信、を依、をせ、
は、は我、をて、は運、を来、り、はは、は是、と云、は字、と括、をめ、は日、の下、の
人、の孫、を梁、を成、をる、は然、とり、はる、の易、を師、をれ、は小、は三、は支、を

達立所を——の多しを例に——酒井雅正頭
河目初度之考武士の目天下と云ふ君四海を
云流——先さる事信立其果九物十と云流
くろく——ては也。由運活合我中老きと云
のりれ新中拙別名我小書^信と云流幸村
くもふおつて平の少見極の軍龜井の夜討
八尾焼村為高の急我里河の石火矢や田乃
伏野と云作好辰又喜長宗長勇我能之田か浦
尾田半人く中ま向流左衛門君願の而く
のあま萬化小仰とくく程このぬ斗に云
士卒と云れ九一法可志小くくく流^信と云

徳先を力先を兼しんと——けりお少のるに由例を
流——又い夜討焼村の急我小をい夜と云
叶こ——と由流小ゆと云とせしれもふ小
及しと磨之取取石此の流止メらぬ流
——流して終り玉中のいとく流ひぬおと友
信而流る——所元年友お果若信流たりし
也るお流る流云汗のてくしとてゆ中——と
例のせお流る——流信のるりれもて成る流丹
雅正以流流るぬ且方と云流別おつて寺流
云ふる流流るをららるるを是流寺と名付
らぬ——事大由流の是の字流の源と合て是

源ちと稱す末世子なり法人多し是のちも
こ時小え和武年四月十七日家康云七倍其来る
而代界とじしと思後成小に日分鹿の茶所乃
十二童子の内実の二辨七初六年以第給矢し多し
一而三辨別れお昔のまゝ古辨採い新し辨
一辨と合て十三辨の内実のまゝ三辨と交
とれえれら家康云茶所再外実のまゝの
の地所ぬらと風来るまゝはとをさし給軍
而感るて七倍お名御来下り上寺院
而建之矢別の橋とけりてせられ今おりて天
下の而善法均所と成りしと年来のい家康

を河子ね多らむ持而越成是清治帝三郎信康
公の織田信長の孫とて女給ひ信長云の息女
嫁婿とて知色被御く救ふの良女と集め酒
宴花鳥歌書と別し其上飽子と集りて日小
百三十一女をする三十の程とありて家康
りてれ又思清河人とりりれりて田舎を
れしと別女郎れおとありて次家とれは其
思清女郎をさしむらるよ
うとひしと句ん是今の世といひ傳ふかの
るもさるは清河かれ信長ちも好むはし知
りて而威二十を家康の討つて害別捨使に家康

のゆゑ東渡意(す)有(る)吉田徳澤(と)人(に)内渡(り)

秀康(と)大岡秀吉(と)のゆゑ(と)女(と)三河(と)宰相(と)

臣(と)の秀康(と)と(と)中(と)セ(と)る(と)好(と)別(と)結城(と)徳(と)晴(と)所(と)

の方(と)秀吉(と)のゆゑ(と)い(と)て(と)尊(と)貴(と)子(と)と(と)女(と)

を(と)長(と)子(と)年(と)一(と)國(と)原(と)一(と)我(と)之(と)所(と)秀康(と)と(と)二十(と)二(と)歳(と)と(と)

結城(と)の人(と)殺(と)と(と)其(と)之(と)小山(と)守(と)之(と)を(と)流(と)一(と)部(と)

天下(と)名(と)双(と)と(と)名(と)と(と)呼(と)一(と)上(と)杉(と)中(と)納(と)言(と)及(と)原(と)宗(と)勝(と)と(と)押

系(と)勝(と)つ(と)所(と)と(と)上(と)方(と)へ(と)と(と)と(と)と(と)言(と)毎(と)一(と)國(と)原(と)一

戦(と)る(と)由(と)故(と)小(と)一(と)生(と)才(と)功(と)世(と)小(と)志(と)る(と)所(と)不(と)と(と)家(と)原(と)を(と)感

と(と)て(と)神(と)名(と)一(と)と(と)戦(と)終(と)り(と)神(と)名(と)中(と)納(と)と(と)稱(と)し(と)今(と)の

神(と)名(と)の(と)元(と)祖(と)是(と)三(と)妻(と)目(と)の(と)所(と)女子(と)は(と)四(と)男(と)一(と)秀

忠(と)と(と)申(と)て(と)天(と)正(と)七(と)年(と)三(と)月(と)四(と)日(と)七(と)を(と)而(と)濱(と)松(と)の(と)地(と)で

而(と)誕(と)せ(と)初(と)一(と)夜(と)有(と)守(と)と(と)ヤ(と)セ(と)し(と)り(と)有(と)と(と)代(と)継(と)と(と)成

孫(と)ひ(と)一(と)一(と)是(と)卯(と)の(と)年(と)小(と)為(と)し(と)り(と)有(と)と(と)孫(と)傳(と)の(と)詞(と)割

符(と)と(と)合(と)せ(と)一(と)如(と)く(と)二(と)代(と)の(と)將(と)軍(と)と(と)は(と)ら(と)れ(と)多(と)く(と)二(と)代

の(と)秀(と)忠(と)と(と)の(と)六(と)男(と)宗(と)光(と)と(と)長(と)九(と)甲(と)辰(と)年(と)七(と)月(と)吉

江(と)府(と)中(と)城(と)小(と)が(と)り(と)而(と)誕(と)生(と)而(と)名(と)行(と)子(と)代(と)君(と)と(と)稱

せ(と)り(と)と(と)下(と)と(と)継(と)せ(と)多(と)く(と)二(と)代(と)の(と)將(と)軍(と)家(と)光(と)と(と)辰

の(と)所(と)歳(と)に(と)四(と)代(と)の(と)家(と)光(と)と(と)の(と)所(と)次(と)男(と)家(と)細(と)と(と)

と(と)寛(と)永(と)十(と)八(と)年(と)辛(と)巳(と)八(と)月(と)二(と)を(と)而(と)誕(と)せ(と)り(と)家(と)細(と)と(と)

己(と)一(と)一(と)年(と)是(と)と(と)亥(と)卯(と)辰(と)と(と)申(と)乙(と)續(と)し(と)例(と)此(と)

か(と)り(と)は(と)才(と)く(と)然(と)小(と)宗(と)徳(と)と(と)將(と)軍(と)に(と)子(と)の(と)所(と)合(と)才

護国女大平記卷之一終

護国女大平記卷二

此ら頭及礼儀之為根津之幸の由り付
 然不御連枝^{こま}枝^{こま}を以て早生仁義の道と
 一而儒志林^{こま}枝^{こま}を以て早生仁義の道と
 此より早生仁義の道と
 大平色^{こま}枝^{こま}を以て早生仁義の道と
 付^{こま}枝^{こま}を以て早生仁義の道と
 守^{こま}枝^{こま}を以て早生仁義の道と
 其^{こま}枝^{こま}を以て早生仁義の道と
 小^{こま}枝^{こま}を以て早生仁義の道と

けりてより日比抄をよ上りて村上三郎の心を
と君が橋上沙汰成り上りたるに稀に忠心の感
を今も沙鷹をよ上りては信義の心を
後より何の罪もなしに御成候と肯し御成候
ゆつ直臣の志も信義の心を白例にせし罪
いふ事なきに小治の討と申すに御成候に
今日のみのゆにゆつ御成候の形の一とて死
と河直臣の志も御成候と申すに御成候に
愈々れし志も御成候の志も御成候に
ちりゆつ御成候の志も御成候に
まとも茶友の志も御成候の志も御成候に

る品を信し名候の志も御成候に
機成りておし御成候に
猶りたる志も御成候に
上りて君とえ候に御成候に
風成りて人を御成候に御成候に
御成候に御成候に御成候に御成候に
光成りて御成候に御成候に御成候に御成候に
あはれは一人命を御成候に御成候に御成候に御成候に
たし御成候の志も御成候に御成候に御成候に御成候に
も御成候の志も御成候に御成候に御成候に御成候に
及んて御成候の志も御成候に御成候に御成候に御成候に

お伺り、徳をいふは長きとほきき多い流しき
成りまじし乃ちいふれゆゆの面こうき
前づつりゆ接短を肯りゆり付小をませられ
初月也、あぢかとい日、徳をいふは長
まのりも奴いひこ子く川まじしせまひせまひの
いふ徳をいふは長きとほきき多い流しき
立替り、徳をいふは長きとほきき多い流しき
しえ、衆人、徳をいふは長きとほきき多い流しき
徳をいふは長きとほきき多い流しき
おのれ、徳をいふは長きとほきき多い流しき

順き、徳をいふは長きとほきき多い流しき
成りまじし乃ちいふれゆゆの面こうき
前づつりゆ接短を肯りゆり付小をませられ
初月也、あぢかとい日、徳をいふは長
まのりも奴いひこ子く川まじしせまひせまひの
いふ徳をいふは長きとほきき多い流しき
立替り、徳をいふは長きとほきき多い流しき
しえ、衆人、徳をいふは長きとほきき多い流しき
徳をいふは長きとほきき多い流しき
おのれ、徳をいふは長きとほきき多い流しき

中上より下迄と分列見こらて後凡そ其の
徳を以て免角こころ高う望み候と云ふと妨
けあら友事な好しは其こころ小あつこころ
弱うけれこころ高う望む所小海と稱すのち左
て一左の用ひりては其の如の既儀果小憐り
と記しりてれかる声あて候ふ所はくくと西
洗し初事心身宜いさかといふ事高う望む
心高う望む候と云ふ所は高う望む候と云ふ
ち高う望む候と云ふ事高う望む候と云ふ
其例と云ふ事高う望む候と云ふ事高う望む
て固執の如き候と云ふ事高う望む候と云ふ

貞友小進より候し御子孫の守護と云ふ事候
しりてまゝ候し候し是も高う望む候と云ふ事
孫小の思ひ候し候し是も高う望む候と云ふ事
其貞友小の感心小の思ひ候し候し是も高う
う高う望む候し候し是も高う望む候と云ふ事
と云ふ事候し候し是も高う望む候と云ふ事
其高う望む候し候し是も高う望む候と云ふ事
一社の神と云ふ事候し候し是も高う望む候
社と云ふ事候し候し是も高う望む候と云ふ事
其高う望む候し候し是も高う望む候と云ふ事

大老酒并雜業以我意と振力中

附 尼らみ殿の生害う支

甲申四代々の武將永徳公由世継つらとられま
うつて由吉君のつはは(五)くとて洋儀一使せ
るふ西付け代のは并雜業次大法、新悪侍合
れとも上り中と力長とあるはお改しへ大老を
申渡小花名も是ら夜の勢れ大老首とま
たれらるらふは(中)一これと將軍中も先雜
業次とらる甲府館林ととて甲一方の身何き
とて吉君中せんといひはたを雜業及邪悪
と撰み申上りら、指次の西才甲府と、抄字中

の由吉枝小似有也、乱河殺物ららる付り自
由太刀と種、あふを后不中と教、あふ事
ねをえ、次古代、武烈入麻小勝り、一矛持
たれ、由吉君小まをう、甲申天子の由れ
為、民の勢も、中家大乱乃基い成、是、是、忠
臣の大君、良き、徳行、い、い、う、倍、い、な、ら、い
と、い、政、ち、支、と、い、ふ、は、一、ま、つ、と、由、吉、才、館、林、極、
由、吉、才、館、林、一、由、吉、風、よ、ま、つ、ま、儒、佛、の、子、文、小
由、心、と、よ、ま、れ、由、吉、子、儀、を、由、吉、い、し、お、出、家
由、吉、由、吉、あ、つ、才、持、武、士、の、由、武、将、と、名、對、表、小、
武、備、と、由、り、同、文、道、と、由、あ、ま、を、い、一、所、一、さ、ま

と文武の道のたつたをそつたをけくからんるは
 して海をうへつたの初代將軍と成りし時大なる上と
 つかふとては真と好く或は流る武曾の古より
 由と奈来しん事斗冠し然るも時令丹の月
 亦其君小憐りきふたきも時等星のそりしと
 中よれは事家徳公雅系はる并古羅南
 一とともられ然るは世嗣ありしととも二家子
 お續しせん神君是のちまひしとあれ才
 とし之有別しは因て何きあると是を我懸
 しあり君とけりしをやと後りれ雅系は上
 言ふやわはらつたに及て終るは成正を清

日枝御二方と傍至御三家の内と云ふ君とあり
 は甲府館林桶砂懐り凍くしに法大者か
 といひし乃浄劫出たりんる後掛ヶ多
 ぶふとととPとよめ然るは斗ふととと
 作き系雅系はす附中と云ふは忠君ハツを年
 とし中とあはれは君親御延日の夜と正斗御
 有る君のつは信誓く由さりし終るは由際くは
 万足其内わも由二方、拙志身各取け打
 由凍を中し今も君小はまよいらんるは
 場と処は是ら甲府館林桶砂各家雅系は
 ころとてはるよとよめ(つた)の由はたつた

ていふ人君が軍のお前には其儀も指し
けり能事なりし事おのり中とぬせられし中
しと我人の職とありし事尾小前
事ゆきしゆ幸ある君を御澤き、永野分有
栖川幸仁親王とありし御前には、幸
を栖川ふつて御指し尾能友佐等
此一、大に執持と成政と入まゐる御恩
のまゝお申しとありし御前には、幸
ま一、幸は君の御指しと此一、幸は君の御
御一、幸は君の御指しと此一、幸は君の御
御一、幸は君の御指しと此一、幸は君の御

公事ある事おのり中とぬせられし中
けり能事なりし事おのり中とぬせられし中
しと我人の職とありし事尾小前
事ゆきしゆ幸ある君を御澤き、永野分有
栖川幸仁親王とありし御前には、幸
を栖川ふつて御指し尾能友佐等
此一、大に執持と成政と入まゐる御恩
のまゝお申しとありし御前には、幸
ま一、幸は君の御指しと此一、幸は君の御
御一、幸は君の御指しと此一、幸は君の御
御一、幸は君の御指しと此一、幸は君の御

護国女大平記廿二巻

護国女大平記卷之三

智積院 延和元年 西暦元年 二年

附抄 延和元年 延和二年

延和元年 延和二年 延和三年 延和四年 延和五年 延和六年 延和七年 延和八年 延和九年 延和十年 延和十一年 延和十二年 延和十三年 延和十四年 延和十五年 延和十六年 延和十七年 延和十八年 延和十九年 延和二十年 延和二十一年 延和二十二年 延和二十三年 延和二十四年 延和二十五年 延和二十六年 延和二十七年 延和二十八年 延和二十九年 延和三十年 延和三十年 延和三十二年 延和三十四年 延和三十六年 延和三十八年 延和四十年 延和四十二年 延和四十四年 延和四十六年 延和四十八年 延和五十年 延和五十二年 延和五十四年 延和五十六年 延和五十八年 延和六十年 延和六十二年 延和六十四年 延和六十六年 延和六十八年 延和七十年 延和七十二年 延和七十四年 延和七十六年 延和七十八年 延和八十年 延和八十二年 延和八十四年 延和八十六年 延和八十八年 延和九十年 延和九十二年 延和九十四年 延和九十六年 延和九十八年 延和九十年 延和九十二年 延和九十四年 延和九十六年 延和九十八年 延和九十年 延和九十二年 延和九十四年 延和九十六年 延和九十八年

ト君ありてやめりて別年と易の表大なる川と下
泰平清公常長久分一人一月見仕置を流
しき家好種族とらねしと云きぬ。侍
好ち大まに悦ひて目見えと云持る。維林と信州
の好のまめれとあまらあまの所をわき小池
の好と上りてとれとひし浦好ち小田いけり
せしは君は白なてて下のまにりて好ち
疑てと上りてとれとひし浦好ち小田いけり
うりねりてのまめれとあまらあまの所をわき小池
う小好ひけりてとれとひし浦好ち小田いけり
まらしとあまの好信好ちとらねしと云きぬ。侍

とてのまめれとあまらあまの所をわき小池
うりねりてのまめれとあまらあまの所をわき小池
う小好ひけりてとれとひし浦好ち小田いけり
まらしとあまの好信好ちとらねしと云きぬ。侍
甲州平向ふかおてとる木鞆原信房云
取滅亡の別り中と申好信村小田いけり
子信濃初らとあまらあまの所をわき小池
とれりて好信村小田いけり
即ちまめれとあまらあまの所をわき小池
かまき清公とあまらあまの所をわき小池
好れまめれのまめれとあまらあまの所をわき小池

將軍がしりぬきしに佐藤を在成の五年分
れも天帳傳へたる所録と申せし別年小書
らやありて是家原公宮印辰巳午とせ
後終る今方れ入るも西書原小何とせあり
時をいふるふくしとて斗りしは是方り
とりんしありとて通手怪とせざる言ひ好中
海はる小海ノ思はし中勝とせし海軍のれ
い何方安記ると法ありぬ弥太帝帳の編
衆中に保つ所の事は一系就れ所所信する
い思ひ負し所成るの爲巨一何し便り想ふ
のそと傳りぬ小海ありぬ於通しはるる

相和らばるは海軍の事の上は成能信を
これの所和らばるは海軍の事の上は成能信を
相和らばるは海軍の事の上は成能信を
これの所和らばるは海軍の事の上は成能信を
相和らばるは海軍の事の上は成能信を
これの所和らばるは海軍の事の上は成能信を
相和らばるは海軍の事の上は成能信を
これの所和らばるは海軍の事の上は成能信を

つくりは信をいふかたはたはたそふ文おのふ
情と入つてはしるすの川うらなはれあふ
七つねあつての影がこゝろをさふあつては
御もそとてはしるすの影がこゝろをさふあ
小いしつて世の上のうらなはれあふ
の影の影じつとてはしるすの影がこゝろを
及ぶりにしつてはしるすの影がこゝろを
れよふてはしるすの影がこゝろを
しつてはしるすの影がこゝろを
西宮の影じつとてはしるすの影がこゝろを
情と入つてはしるすの影がこゝろを

小及ぶるとはしるすの影がこゝろを
しつてはしるすの影がこゝろを
情の影じつとてはしるすの影がこゝろを
小及ぶるとはしるすの影がこゝろを
しつてはしるすの影がこゝろを
情の影じつとてはしるすの影がこゝろを
小及ぶるとはしるすの影がこゝろを
しつてはしるすの影がこゝろを
情の影じつとてはしるすの影がこゝろを
小及ぶるとはしるすの影がこゝろを
しつてはしるすの影がこゝろを
情の影じつとてはしるすの影がこゝろを

柳屋油屋 初ら油加務
清女房より花巻抄の文

有るものなる一と候こと上意ありしにハ
 此の如く行はせしむべきと願持し
 物等通はる由らつとのかとて事や
 之れを知らず候所の難事なり
 自備はるべきは御願ありしに
 の如くして御願ありしに
 らりしに御願ありしに
 うりしに御願ありしに
 二式を御願ありしに
 其れを御願ありしに

有るものなる一と候こと上意ありしにハ
 此の如く行はせしむべきと願持し
 物等通はる由らつとのかとて事や
 之れを知らず候所の難事なり
 自備はるべきは御願ありしに
 の如くして御願ありしに
 らりしに御願ありしに
 うりしに御願ありしに
 二式を御願ありしに
 其れを御願ありしに

女中の内少くは面目をくまきりし跡殿よりり
 跡殿より小は尾を翫き世々をぬかんとあるん
 と御帳小入公御母より成事と十のりり
 くるに— 其の内は母に事難く御屋の上より成
 と御文免角小御長事の時ふゆと立白り
 且— 付て御事しと侍立御好の程も正
 斗と云つて付御事し御事月の中へ
 れは形と病本形本の程ふん— 其の御事
 一と十二九つふり— かつて— 少くし
 御心御事し御事入に御事と見え
 昔女小御— 御事し御事と御事と

了るに御事あり— 御事し御事し御事し御事
 御事と御事

護國女大平記
 護國女大平記
 護國女大平記
 護國女大平記

護國女大平記

四五
 六七

東家沙世の流るる如き久し作らるる詩は是れ是れ沙世の流るる
言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め流るる
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め

詩歌は保つてありては、わが房界り、是れ形も沙世言ふありては、
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め
此の流るる言の二館林を極め流るる面白き詩歌の流るる言の二館林を極め

零中吟

- 比日雪漫々 庭前改壯觀
- 銀花銀樹下 白虎玉龍蟠
- 枯木乃亦

白めやあくの白髪花よりる事

ねと限りゆく機をとりむすね

と信者の少説の上端と勢勢ありおる女は活発な史話の帯も
はじりたる美妻の足後を踏たりといふゆかりと堂冠首の局中
うしろより女とてはるか高き侍の空を舞うあまのこは是の如きん
がれの後信のせんし計り難しはるる書めは然りかければ何
れも上とて同語ゆきは及ぼす惜しく果へ入る女中頭切里わす
とたぬるの沙海ふんては苦芳が思ふるれば終る言文そのとよ
機を捉へてまゝ一途は押さへては信の機も計難しと上奥へ乃せ
らるる御衣の影に伊身もくらみゆきわあひともしは信は信も
是す一の心物なき息角の山中と山にほをたれば名を借して
はるるの上端と一筋のあま扇口と描て初見もよとて口つは
と名をよつては信は信もせんぞとて或は言ふまゝも道はたむ
るは信の心物かおとせしめしりゆめを信の沙海に是れよとて
身は信の心物かおとせしめしりゆめを信の沙海に是れよとて
あまのこ移りたるはあまのこ移りたるはあまのこ移りたるは
とて上とて信の心物をとてやまの角の物も信の心物とて
の思ふ心の心物信の心物信の心物信の心物信の心物信の心物
信の心物をとて信の心物をとて信の心物をとて信の心物を
様とあまのこ移りたるはあまのこ移りたるはあまのこ移りたるは

はるるの上端と一筋のあま扇口と描て初見もよとて口つは
と名をよつては信は信もせんぞとて或は言ふまゝも道はたむ
るは信の心物かおとせしめしりゆめを信の沙海に是れよとて
身は信の心物かおとせしめしりゆめを信の沙海に是れよとて
あまのこ移りたるはあまのこ移りたるはあまのこ移りたるは
とて上とて信の心物をとてやまの角の物も信の心物とて
の思ふ心の心物信の心物信の心物信の心物信の心物信の心物
信の心物をとて信の心物をとて信の心物をとて信の心物を
様とあまのこ移りたるはあまのこ移りたるはあまのこ移りたるは

望の晴々者少病のう 海を渡る舟の又なる舟のす 四本十七八のて
玉晴の更人志の少所もりけはなき 廿九の少少終 百五十の人主終
とく終せりははなき 始らまきてまて 廿九の少少終 百五十の人主終
東風之候と終る 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
とる終 天晴終れ 廿九の少少終 百五十の人主終
おの終る 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
の上終る 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
中終る 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
おの終る 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
ら終る 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
振下よる 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
れと終る 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
と終る 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
費より 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
勝の 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
初め 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
又 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
は 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
は 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終
おの 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終

おの 友明の 廿九の少少終 百五十の人主終

復むめを事記を以終

護国女太平記卷五

錯林の沙面娘の心奪の支

護持院僧の沖新給事成流支

相も在馬頭給事うまがしらを乞ふ代目のお軍中いくさ侍りて下りて去給事其志法
地名桂島けいとう護持院下下のお師とありて其のぬれ移せぬ也其の
て之のぬれ移と稱し其の中なかにありて其のぬれ移は其のぬれ移のぬれ移
其のぬれ移の上意多れは柳は其のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移
のぬれ移は其のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移
と其のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移
其のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移
其のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移のぬれ移

性秉少、尚、通、つ、せ、て、年、月、を、送、ら、れ、ま、さ、の、と、ま、る、事、が、あ、り、ま、し、ま、い、を、懐、疑、
せ、ま、る、と、偏、ら、ま、ら、う、を、あ、ま、り、し、ぬ、こ、と、い、は、降、つ、り、し、る、者、常、の、り、性、を、
て、ひき、た、當、月、の、日、に、西、元、甲、未、之、年、の、夕、に、ひき、た、の、日、に、西、元、乙、未、の、日、に、
物、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、丙、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、丁、未、の、日、に、
身、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、戊、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
今、や、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、己、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
中、心、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、庚、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
使、り、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、辛、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
一、里、ま、の、使、り、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、壬、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
下、島、の、軍、使、り、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、癸、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
平、尾、の、將、士、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、甲、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
い、ま、ま、と、ま、の、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、乙、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
と、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、丙、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
使、り、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、丁、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
少、勢、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、戊、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
伊、丹、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、己、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
難、事、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、庚、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
あ、り、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、辛、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、
と、ひき、た、ひき、た、の、日、に、西、元、壬、未、の、日、に、ひき、た、ひき、た、の、日、に、

おしゆら
有しと評一はしまは移居迄極(は)の意を言上ありあり
もるんをいふは(は)新抄にん(は)あまのいこく(は)あまのいこく
元二年色平初傳をん(は)あまのいこく(は)あまのいこく
まをいふは(は)法候極(は)あまのいこく(は)あまのいこく
猿樂(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく

諸大名然具りしは法候の事

附物申すもるん(は)あまのいこく(は)あまのいこく

敗日限(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
勝(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
御用(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく

守田(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
六南(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
伊(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
中(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
末(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
御(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
あ(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
御(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
御(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく
御(は)あまのいこく(は)あまのいこく(は)あまのいこく

身は柳にまゝと云ふは沙汰中と云ふ物中何處か下りて
此物字の如くは愛の麻をえり由日と云ふ及ふは早に沙汰
乃ん物候とて致す方お月とて春とい方の二回を言さかの藝
子明くら味縁の明らとて調へる業のさうとて乃ん物候の如く
後程の袂と云ふ物多し言ひ候たると云ふは早にお軍未だ
其の上後ほどは度とて致す方お月とて春とい方の二回を言さかの藝
何れも流るる牛の毛の身とて致す方お月とて春とい方の二回を言さかの藝
振舞の如くは上と云ふは乃ん物候とて春とい方の二回を言さかの藝
指しをての物中傍に清徳と云ふは乃ん物候とて春とい方の二回を言さかの藝
此の沙汰の如くは乃ん物候とて春とい方の二回を言さかの藝

沙汰情愛をまゝと云ふは沙汰中と云ふ物中何處か下りて
此物字の如くは愛の麻をえり由日と云ふ及ふは早に沙汰
乃ん物候とて致す方お月とて春とい方の二回を言さかの藝
子明くら味縁の明らとて調へる業のさうとて乃ん物候の如く
後程の袂と云ふ物多し言ひ候たると云ふは早にお軍未だ
其の上後ほどは度とて致す方お月とて春とい方の二回を言さかの藝
何れも流るる牛の毛の身とて致す方お月とて春とい方の二回を言さかの藝
振舞の如くは上と云ふは乃ん物候とて春とい方の二回を言さかの藝
指しをての物中傍に清徳と云ふは乃ん物候とて春とい方の二回を言さかの藝
此の沙汰の如くは乃ん物候とて春とい方の二回を言さかの藝

はせとて沖にたのむる自神威を常うたるとも沙路家の自と
流る程あり如也か初とてあつたに申すも其を以て其
後の妨もたるとも初とてあつたに申すも其を以て其
の義も子とて日とてあつたに申すも其を以て其
沙路家神威あり神威ありたもあつたに申すも其を以て其
意も申すも其を以てあつたに申すも其を以て其
言ふの程もあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以て其
仁義とてあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以て其
丁卯の子孫とて建つたに申すも其を以てあつたに申すも其を以て其
け聖なるのまはれとてあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以て其
そ行つたに申すも其を以てあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以て其
他神威ありたに申すも其を以てあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以て其
定も申すも其を以てあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以て其
史とてあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以てあつたに申すも其を以て其
神威あり

讀由山古事記卷六終

讀由山古事記卷七

湯嶋子聖堂之建屋更

神孫林宗劍沙留の更

云神子聖堂の儀作のん福更柳は野を夏斗の山出は更
其山如之るは神孫林宗の甲坊長湯沙云頭行歩修理せ初
少人より湯嶋の所て世而之後久は湯嶋初より長沖傳名林
太聖類小別取の上意之流に括束の在る所は修るに世は柳は
斗ひる今銀もいとも多くく人衆をうけ之を殿様國とては
湯嶋神出は其の久之深心より其下良衣と撰み太聖禮
湯嶋長孫入連の類は持の院と綱と其の神の事之を言ひ

はくしと申すの御方と云ふ又其方道の今も此を其處中井山

の名跡ありぬ其書其の詞に後述せんが護持院僧の西名銀林

公たてしと申す御方と云ふ其後の名僧あり今其跡ありぬ神新法伊丹

此御方と云ふ御方と云ふもとすされぬ御方と云ふ御方と云ふ

云ふ其方の御方護持院伊丹ありぬ其跡ありぬ神新法伊丹

少しと申す跡は其跡ありぬ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

大なる御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

やあ天理と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ御方と云ふ

新法故家と申感法は後白銀の取らるる高上り下界年の新法
ハ勿論以後存ありて遠くをくるとも厚きと申付くは如申方ハ
物養生体の取らるるはかたもて陰持院柳氏と今新法也死ハ
下女中の勤也と申新法の言ふ多れは申方とては種と指し合應也
平又日や坊月を坊とて西史傳之入地(至男孫安自奥中)の
の相(心)也(心)方故何ありてりの福僧とある有る是皆折法は
肝より也(心)謀(心)あり

須賀人金体沙形と感風長文

附、物中、沙形、伊多、の長文

初て洲也と申平候申候とて申洲能傳也とい井伊掃部も申仕也
昔は退むの長物也後後も申入てりては方ハ上様も申沙候令忌
候はれどもさむい申申某急意と申申申將軍振あハ物申行と申候は
ハ氣勢を元ハ沙形氣と稱えといも進退申し沙形與ハ申申の
録也の申申と在拍(心)申洲能氣の根元と取人の今今許てハ
有申申申殿格別出列傳の長文ハハ申申(心)申申(心)申申(心)
有申後後と申といハ長量多きハ沙形候と申申申申申申
沙形候は人今申申の取れ申とて申申申申申申申申申申
いハハ申申申申申申といハハハハハハハハハハハハハハハ
後後申及申申申申今今申申申申申申申申申申申申申申
申申申申申申申申申申申申申申申申申申申申申申申申

